

大阪・植附遺跡^{うえつけ}

1 所在地 東大阪市西石切町一丁目

2 調査期間 一九八七年(昭62)二月～三月

3 発掘機関 財東大阪市文化財協会

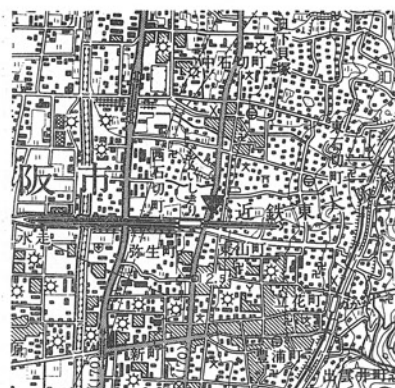
4 調査担当者 中西克宏

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 前一世紀～一七世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

植附遺跡は、生駒山地の西麓、標高一五m前後の扇状地上に位置する。これまでの発掘調査によって、本遺跡の範囲は東西約五〇〇



(大阪東北部)

m、南北約六〇〇mに広がるものと推定され、弥生時代から近世に及ぶ遺構、遺物を確認している。今回報告する調査地点は、遺跡の推定範囲中最も南寄りで、西ノ辻遺跡に隣接する部分にあたる。

調査では、弥生時代・鎌

倉・室町時代・近世の三時期の遺構と遺物を確認した。鎌倉・室町時代の遺構には井戸八基、土坑一四基、溝六条などがある。これらのうち木簡は井戸三から一点、土坑三から三点出土している。

井戸三は、直径約二・三m、深さ一・一m以上の円形を呈する素掘りの井戸である。木簡は、井戸の埋土下層から一四世紀の瓦器・土師器・須恵器などの土器類や陶磁器類、瓦、木製品、砥石とともに出土した。

土坑三は東西長四・五m、南北長三・一m、深さ〇・九mを測る。平面形は、攪乱によって変形されているものの長方形を呈する。木簡は、土坑の埋土下層から一四世紀の瓦器・土師器・須恵器などの土器類や陶磁器類、瓦、木製品、漆器などとともに出土した。

8 木簡の積文・内容

(1) 「百門□般若経□」 163×30×2 011

(2) 「咄吠哩(符籙)急々如×」 223×23×3 011

(3) 「咄吠哩(符籙)急□如律×」 (120)×24×3 019

(4) 「<蘇民将来之孫住宅所也」 143×32×2 032

(1)は井戸三より、(2)～(4)は土坑三より出土した木簡である。(1)は「般若経」と記すことから大般若経転読札との関連性が指摘できる

が、「百門」の語句が難解で、意味は判然としない。但し、大般若經転読札とは、大般若經六百卷を転読誦唱し、その法会に際して作成された木札で、村落の安全と五穀豊饒を祈念して家の門口や戸口、村の境界に立てられたことからすれば、「百門」とは木札を据え置く場所に関係した表現とも考えられる。上端は圭頭につくる。下端は製作段階で切断したまま終わっている。「般若經」以下は磨滅が甚しく釈読不能である。

(2)(3)とも文頭に咄呷哩を記す天罡星符である。(2)は完形で、上端を圭頭にし、下端は当初は尖らせたものと推定される。咄呷哩の下に符籙を記す。「戸」(しかばね)を三つ縦書きし、各々の間隙に「口」字や曲線を配する。(3)の符籙は横線で区画した中に「日」字を上三つ、下に四つ記す。「戸」「口」「日」字とも天罡星符に頻出するものである。

(4)は蘇民将来札である。家の軒先に吊すため上端の左右に切り込みを入れる。文字の誤記が認められるが、それ故に中世における呪術習俗の広まりを示す資料といえよう。

なお、今回の木簡四点が出土した植附遺跡の調査地点は、過去に呪符が四点発見され、その後も信仰の木札や呪符が出土している西ノ辻遺跡のすぐに北に接している。これらのことから木簡の資料性の問題については、西ノ辻遺跡出土例と合わせて考えるべきであろう。

釈読については、千手寺住職木下密運氏のご助言ご教示を得た。
9 関係文献

「植附遺跡」(東大阪市教育委員会『東大阪市の歴史と文化財』二一九〇年)

(1) 7
8・9 中西克宏
菅原章太

